

## スポーツにおける「技術」の形態学的視座

佐野 淳

### **A phenomenological-morphological study on the technique in sport**

**SANO Atsushi**

The purpose of this article is aimed to construct a base of the theory on technique in sport from the consideration in a phenomenological-morphological aspect. The term "technique" is generally used in the field of sport practice and sport science. In fact, however, there is a crevice between practice and science. Scientist's greatest interest is mainly in the improvement of physical performance and psychological problems. And in sport science the study of technique is based on biomechanics, which has its origins in physics, anatomy and physiology. However these studies have not dealt fully with practical problems in sport. But it is only one aspect of the study of technique in sport.

As MEINEL, K. pointed out, technique in sport is products of practical experience, and people know also from their own experience this fact. Therefore, it is necessary to shift viewpoint from the above scientific approach to the practical, namely, phenomenological-morphological approach. This shift enables us to understand sport technique as an problem on the spot. Phenomenological-morphological approach presents some important considerations.

On the basis of this understanding, problems of the technique in sport can be summarized as follows : movement form (Bewegungsgestalt) is dominated by a movement purpose ; technique in sport is teleological problem : technique in sport has "noesis-noema" structure : technique in sport is "morphe" technique.

In this way, the technique in sport is caused by subjective factor. This result is important to construct the "practical theory" on technique in sport.

Key word : Technique (in sport) , Movement form, Bewegungsgestalt, Noesis-noema, Movement theory, Phenomenological-morphological study

### **Zum morphologischen Aspekt der sportlichen Technik**

In den letzten Jahren hat die Sportwissenschaft der theoretischen Begründung der sportlichen Technik nur wenige Aufmerksamkeit schenken trotz ihrer Relevanz in der Sportpraxis. Ausschließlich sind die für die meisten Sportwissenschaftler interessanten Themen auf die Verbesserung der physischen Leistungsfaktoren und psychologischen Einstellung gerichtet. Infolgedessen steht es außer Zweifel, daß wir noch nicht zufrieden mit der Theorie der sportlichen Technik im Vergleich mit der des konditionellen Bereichs sind. KANEKO, A. hat so gesagt, daß die Theorie und Methodik der sporttechnik immer in der Rückständigkeit bzw. Vernachlässigung bleiben.

MEINEL, K. hat in seinem Buch "Bewegungslehre" gesagt, daß man unter die Sporttechnik eine in der Praxis entstandene und wirklich existierende Ausführungsweise verstehen soll, aber überhaupt nicht ein rational-konstruiertes Lösungsverfahren. Daraus hat sich die Entwicklung der Sporttechnik in der verschiedenen sportlichen Disziplinen vollzogen, meist ohne Zutun der Wissenschaft, und wir bewegen uns weitgehend richtig auch ohne diese Wissenschaften. Ferner haben wir bisher in der Praxis viele originelle Bewegungstechniken im Sport erfunden. Solche Brüche zwischen der Sportwissenschaft und der Sportpraxis können sich meines Erachtens vielmehr auf das Wesen der sportlichen Technik beziehen.

Um eine Kluft zwischen dieser Sportwissenschaft und Sportpraxis im Bereich der sportlichen Technik zu überbrücken, soll man vom phänomenologisch-morphologischen Standpunkt aus noch tiefere Betrachtungen über die sportliche Technik anstellen. KANEKO, A. hat sich von diesem Standpunkt aus die tiefe Einsicht über die sportliche Technik gezeigt. In seiner Abhandlung "Prolegomena zur Methodik der sporttechnischen Neugestaltung" (1985) hat er "die gemeinsinnmäßige Technik" vorgeschlagen. Seine Technik-Theorie kann als eine auf die Praxis gerichtete Theorie der sportlichen Technik verstanden werden.

Der Zweck der vorliegenden Arbeit besteht darin, auf der Grundlage der Technik-Theorie von KANEKO eine neue praktische Technik-Theorie aufzubauen. Deshalb wurden die Gesetze der Bewegungsgestalt und der phänomenologische Aspekt einbezogen. Dabei wurden folgende Gesichtspunkte beschrieben: Bewegungsgestalt, die teleologische Auffassung der sportlichen Technik, Begründung der Gemeinsinnmäßigkeit der sportlichen Technik, 〈noesis-noema〉 Struktur der sportlichen Technik. Davon wurde abgeleitet, daß man die sportliche Technik als die "morphé" Technik aussehen soll.

## はじめに

現在広まっている理解での体育やスポーツにおける"技術"(この技術が"運動技術"を上位概念とする"スポーツ技術"であることは言うまでもない(1.-S.661,286頁))は、運動の課題を解決しようとして発達してきた運動形態ないし運動のし方であり、それは効果的、合理的に運動課題の解決を保証する必要不可欠な要素として、特徴的な運動経過を示すことが知られている(5.-S.39,13.-21頁,19.-S.242,261頁)。つまり、当該の運動課題の解決のし方にはさまざまなし方があるが、そのなかでも妥当かつ効果的で、評価の高いできばえを示すための必要不可欠なし方が技術と言われる。例えば、今日、け上がりをする場合の肩角を減少させること、支持になるときに握りを変えることは、そうすることが理想的なけ上りを成功に導く最良のし方、すなわち、技術として、この目標の達成には運動者の誰もが習得すべき内容として必要不可欠なのである。

このような技術のより実践的な視点をめざして、金子は"Prolegomena zur Methodik der sporttechnischen Neugestaltung"という論文のなかで現象学的立場から独自の技術論を展開し、現場で求められるのは共通感覚性の技術(gemeinsinnmäßige

Technik)であり、それはバイオメカニックスの立場から言われる技術とは異なることを指摘した(12.-S.112)。そこでの論点をまとめると次のようになる。第一点、技術は系統発生論的立場に立ってとらえることが重要であること、第二点、スポーツ技術の創作には運動投企が重要な役割を果たしていること、第三点、スポーツ技術は、運動の自己観察と他者観察の間の相互作用に注目されなければならないという意味で、共通感覚性の視点が導入されることによってその実践性が保証される、というものである。このような考え方は、それまでの客観的な運動研究と一線を画し、「内省によってとらえられる精神運動領域(psychomotorische Bereich)」(22.-S.141)に技術の視点を移したものと解される。これによって、技術が"バイオメカニックス的解答"(8.-S.141,239頁)であるとか運動の"理想的なモデル(Idealmodell)"(7.-S.8)といったとらえ方が見直され、より現場的な視点から技術がとらえられるべき根拠が示された。

しかし、この理論がより完全なものとして正当性を得るためには、スポーツ技術をめぐってのいくつかの命題、すなわち、スポーツ技術はアプリオリに組み立てられない、自然法則を知らなくても運動は

できる、習熟するにつれてだんだんと自然法則に近づいていく、技術は伝承される、技術は不変のドグマではないということから新しい技術がどんどん生み出される、個人個人によって技術の受けとめられ方が違う、バイオメカニクスを中心とした科学的研究は現場にどのような関わりをもつべきか、といったこと<sup>(1.-S.661f.,286頁;19.-S.242ff.,261頁)</sup>に対して一貫した論拠で答えることができなければならない。それは、技術はどこにあり、どこからどうやって取り出され、どのようにして定立され、どのようにわれわれがそれを血肉化していくのかという視点に目を向け、技術の本質的性格が明確な論拠によって示されたときにはじめて可能になる。そのためには、次の3点に対する証明がされなければならない。1. 技術は運動形態の細部にまで関与するものであること、2. 技術はバイオメカニクスの法則（力学法則）を基準とした因果論の形ではなく、目的論の形をとること、3. 技術が共通の感覚の対象となりえること、である。これらのことを一貫した論拠で証明するために、われわれは運動ゲシュタルトの法則および確信成立の構造原理を導入する。それは、技術は精密な力学的概念を必要とせず、客観的自然法則に依存しないという仮定にもとづいているからである。この2つの視点があれば、金子の理論を基礎として、現場に目を向けた技術の一貫した理論を組み立てることができる。これが本論の目的である。

以下に展開する考察は、フッサー現象学やゲーテ自然科学に由来する運動モルフォロジー（Bewegungsmorphologie）<sup>(3.-S.41ff.)</sup>にもとづいている。とくにゲーテの形態学的視座は、高橋も考察しているように、われわれを近代的知の偏頗な一面性から解放し、「人間の知の全体性」<sup>(25.-92頁)</sup>へと導く視点を提供している。こうした立場からの考察の不十分さが、今日、スポーツ技術をめぐって研究サイドと現場サイドの間に断層を生み出してきたのである。

### 1. 運動形態の目標依存性

全体性心理学者クレム（KLEMM, O.）は、「Die Entdeckung der Bewegungsgestalt」（1936）のなかで一連の研究の全体的な結論として、運動形成（Bewegungsgestaltung）の命題をいくつかまとめている<sup>(16.-S.10f.)</sup>。そのなかで、かれは「全体は部分よりも正確に構築される…運動系の達成はゲシュタルト性（Gestaltetheit）とともに向上

する」<sup>(16.-S.11)</sup>として、運動成立の法則性（原則）を指摘した。それは、人間が行う目的達成の運動全体の正確性は、部分部分の正確性に優先するというものである。たとえば、投運動においてより遠くへとばそうとする場合、その運動のし方はまず力学的に最適な投角度と投速度が基準となって規定されるのではなく、遠くにとばすために発生する運動形態全体が投角度と投速度のかね合いを規定するのである<sup>(23)</sup>。このことは、人間の運動は、諸部分ないし諸要因の組み合わせからではなく、はじめから全体として生じ、そこでは諸部分ないし諸要因の変化とそのかわり合いがはじめから内包されていることが意味されている<sup>(18)</sup>。

すなわち、このような全体として生じる人間の運動には、同時に胴体の運動や身体四肢の細かな動きが内包されているのである。言い換えれば、人間がある運動を行う場合、そこには身体四肢の細部の動き、すなわち、胴体の動き、腕や脚の動き、背中の使い方、頭部の操作などが必然的に生じ、それが全体としての運動形態を構成するのである。たとえば、ボールを投げるとかけ上がりをするという場合、足の構えや胴体の関与、肩や肘や手首の使い方などが必然的に生じてくる。これら四肢の動きは、まずもって達成目標それ自体を意図しようとしさえすれば、身体四肢の部分にとくに意識的に目を向けなくても、また細かな動作をいちいち思い浮かべるまでもなく必然的に生じてくるものである<sup>(15.-193頁)</sup>。身体の諸部分の動きは、達成目標を意図すれば、その段階ではじめから関与せざるをえないのである。それは、人間が運動することによって現れる運動形態（Bewegungsform）は、運動全体として規定されるまつまりある運動ゲシュタルト（Bewegungsgestalt）だからである。クレムが結論づけた全体の部分に対する優位性とは、まさに、このような全体としての運動形態の発生がその時点で部分を規定し、目的に対して部分がより正確に経過することを示している。

もちろんこの場合、その運動形態が“正しく”“合目的”に生じているのかどうかはここでは問題ではない。もしそれが不十分な達成しか示されなければ、そこに発生した運動形態は当該の目的の達成にはまだ不十分な最適でない現れ方であったのであり、運動習得の初期の特徴だというにすぎない。この場合、次の段階では当然よりよい目標が選ばれ、それに向かって練習が積み重ねられ、

この運動形態はより洗練されたものへと導かれることになる。つまり、胴体や四肢の部分の動きが次第に“合目的”に、そして“正しく”なっていく。この変化が主観的な体験にも反映することは、すでに全体性心理学者たちの実験によって指摘されている<sup>(15.-188頁以下:29)</sup>。この過程においての目標設定の微妙な差は運動形態に微妙な差を生じさせ、運動のゲシュタルト質 (motorische Gestaltqualität) を少しづつ変えていくことになる<sup>(15.-189頁)</sup>。それは、四肢の微妙な動きや運動全体のバランスの変化を示しているのである。まさにわれわれの人間の運動は、客観的な運動経過と主観的な運動形成の統一的な営みとしての全体的行為 (ganzheitliches Tun) ないし精神物理的な生起 (psychophysisches Geschehen) なのである<sup>(28.-S.260ff.)</sup>。このことから、目的を達成しようとして生じる人間の運動形態の全体は、力学的な基準ではなく、そこで設定された目標自体によって規定されることが導かれる。つまり、人間が設定する内的目標こそ運動形成の契機となるのである。全体性心理学者たち (KLEMM, O., STIMMPEL, E., VOIGT, E. u. a) が各種の実験によって得た法則や結論は、客観的な運動と主観的な心的運動体験との比較考察から導き出されたものであり、われわれの問題設定にとってその意義はきわめて大きい<sup>(17)</sup>。

このように運動ゲシュタルトの法則は人間の運動発生をとらえる上で基本的で本質的なものであるし、この法則を利用すれば意図的に望ましい運動形態を発生させることができるということは<sup>(15.-194頁)</sup>、その証左である。こうしてわれわれは、運動形態の全体ないし身体の個々の諸部分の細かな動きを運動達成と結びつけて論じる根拠を得たことになる。

## 2. スポーツ技術をめぐる目的論と因果論について

人間の行うスポーツ運動が物体運動と比肩しうる側面をもつという観点を強調すれば、スポーツ運動は当然自然科学的法則を用いて記述することができる。しかし、人間の運動が物理時間—物理空間やインパルスの経過でとらえられる客観的運動であるとしても、それを行為の主体者自身の体験と結びつけている全体的行為という運動ゲシュタルトと理解するならば、両者の関わり方に目を向けることが重要になる。この仮定は、すでに論じたように、われわ

れ人間の運動は内的目標によってその形態全体が形づくられるということから見て、何ら飛躍したものではないだろう。全体性心理学では、こうした立場から基本的に両者の関係をひとつのまとまりとしてとらえ、その構造特性を研究した。このような運動に関する客観的なものと主観的なものの関係に関する精神運動論—行為理論的な研究の台頭は、トーマス (THOMAS, A.) も指摘しているように、クリスティアン (CHRISTIAN, P.) やヴァイツェッカー (WEIZSÄCKER, V. v.), ボイテンディク (BUYTENDIJK, F. J. J.) に代表される。すなわち、クリスティアンは、「営みの秩序と力学的に客体化される行為の正確さの秩序」の間に体系的な同一性が高いことを認め、「ある一方のものは価値の秩序の中にあり、またある一方のものは力学的法則性の秩序の中でとらえることができる」としている。また「達成は外的成果に対してだけでなく、その内的な調整においてもより正確に形成されるようになり、さらに運動がその価値性において正しいあるいは誤ったものとしてより明確に体験されるようになる」と述べている。また、ヴァイツェッカーは、運動意図や運動体験または運動評価のなかで描かれている心的領域と運動経過の物理的—生理学的領域との間に橋を架けようとした。彼は、行為目標を果たそうとする主体は、その目標から規定される空間—時間的形作法則の基礎になり、その範囲での空間—時間的運動法則に従うとした。さらに、ボイテンディクは客観的—自然科学的变化として“過程” (Prozeß) を、個人と境界の対峙の関係系のなかで知覚される現象として“機能” (Funktion) を指定して区別し、彼の理論の中に“主体” (Subjekt) と“自己運動” (Selbstbewegung) の概念を取り入れて、“機能”的一人間的視点で人間の運動や姿勢の問題を取り上げた。このことから、ボイテンディクの場合、運動の実現と実施、客観的経過の説明は、生理学や心理学のデータでは不十分で、意味と価値の視点が必要であり、それは主体や自己運動の視点によって明らかにされるとした。このように、客観的なものと主観的なものとの関係についてはこれまで多くの著名な学者が論じてきており、実りある運動の本質理解の理論が展開されているといえる<sup>(28.-S.261ff.)</sup>。

ここではそれらの諸理論を考察することが任ではない。むしろ、ここではそれらの理論に基本的に共通している、主観的行為目標の指定と主観に

よる運動形成の視点の存在を指摘しておきたい。なぜなら、われわれ人間の運動は単に客観的事象を取り上げただけでは、現場の実践的な運動問題の解決にはならないことを強調することが必要だからである。これを発展させてみれば、運動発生 の契機はどこにあるのか、という問題がわれわれ人間の運動を解明するにはきわめて重要なことがわかる。かりに、われわれの運動が力学的法則に支配されているという点を強調したとしても、上記のような観点から、それは自然科学的な意味で客観的事実に目が向けられただけでしかなく、人間の運動発生の本質的問題には入り込んでいないのである。人間の運動を取り上げる場合に、何よりも重要なのは“誰がその運動を生じさせているのか”ということである。こうした観点から見れば、次のような構図を仮定することは何らの矛盾を含むものではない—人間の運動は力学的法則に支配されるといっても、それは主観的領域との関係で“主—従の関係”にある、と。もし、この関係が逆転するならば、もちろん、人間の運動は物体の運動としてとらえても差し支えないことになる。しかし、われわれにはこの逆転した関係は受け入れがたい。

このような運動実行の構図はきわめて重要である。それは人間の運動には目的論が成立するか、因果論が成立するかという問題とかかわっているからである。より自然科学色を強めていけば、そこでは目的論が排除されなければならない<sup>(31.-234頁以下)</sup>。なぜなら、自然科学では主観的要素を排除した客観的真理の追求がめざされるからである。物体の落下の運動や力関係による物体の位置移動は因果論の形式で成立し、そこでは初期条件(原因)があれば必然的に「結果」が得られ、原因と結果は一対一の対応関係でとらえられる。一方、目的論は、目的意識から出発し、結果ではなく「目的」の達成に関心が向けられる<sup>(31.-248頁)</sup>。われわれが仮定した構図は、そこに主観的領域を認め、それが運動をリードしていくとした。つまり、そこに目的意識の存在を認めたわけである。したがって、われわれが仮定したこの構図は目的論として成立することは明らかである。運動に脳がかかわっている以上、運動の現実の問題の“正しい”理解は、この目的論から出発するほうが至極現実的といえよう<sup>(31.-251頁)</sup>。もちろん、この結果生じたわれわれ人間の運動は、すでに全体性心理学の研究でも明らかのように、自

然法則性と無関係であるわけではない。習熟するにつれて、われわれの運動はだんだんと自然法則に近づいていくことは、その証左であろう。しかしながら重要なことは、この運動が目的論から発生したものであるということである。この場合の運動形態は、すでに明らかにされたように、運動ゲシュタルトの法則に基づいて目標設定によって決定されるので、あらかじめ運動の力学的要素を算出し、それに合うようにアプリアリに組み立てられたものと一致しない。もし一致しようと言うのであれば、運動形態の細部まで規定できなければならない。しかし、それはできないのである。この場合、人間の運動の力学的な説明は、運動の際の目標を最適に構築する場合の手がかりとしての役割を果たすことになる。

このようなことを背景にしてスポーツ運動の習得場面を見てみると、われわれは何か重要な達成契機を求めていることが指摘される。つまり、“どうしたらその運動ができるのか”、“その運動がうまくなるにはどこに注意すればいいのか”ということが当然の如くわれわれの関心事となってくる。これは目的を達成しようとする場合にどうしても意識に昇ってくるものである。そこでは、試行錯誤を繰り返すなかでより最適なものを選ばれるようになってくる。このような「試行錯誤の原則」<sup>(30.-241頁以下)</sup>によって、意識のなかに達成契機として生じてくる“運動のし方”を、われわれは“(スポーツ)技術”と位置づけるものである。これは運動の発現によって現実のものとなり、可視的な運動経過のなかに示されることになる。この場合、胴体のねじれや肩の引き込み、四肢の操作のし方、腰の回転、頭部の位置などが“技術”としてわれわれの意識にのぼってくる。このことから、それらが目的との関係で主観的領域で問題となっていることがわかる。

以上の考察から、技術は運動実行の際にそれをリードする主観的領域で取り上げられていることが指摘される。“自然法則ないし力学法則を知らなくても運動はできる”<sup>(19.-S.247,266頁)</sup>ということは、達成契機としての運動のし方(技術)が主観的領域に存在することの証左でもある。

### 3. “技術”の共通感覚性を証明する理論

これまでの考察から、技術は主観的領域で取り上げられるべき根拠が示された。このような立場に立っていると考えられる金子の理論によれば、

技術は選手とコーチに共有されなければならないという<sup>(12.-s.108f.)</sup>。これは技術の実践性を保証する意味で、きわめて重要な技術認識である。金子はこのことから、技術に共通感覚性の視点を措定した。このような技術の考えは、“技術の伝承性”ないし“公共性”ということによって裏付けられる。技術が師匠から弟子へ、コーチから選手へと伝わり、また選手から選手へとどんどんと広まっていくのは、技術に“感覚共鳴”<sup>(14)</sup>ないし“共通感覚性”があり、誰もが感覚的に共有しようと考えられるからである。この問題性に踏み込まなかったところに、これまでの技術論の不十分さがあった。その意味で、金子の言う“共通感覚的図式技術”<sup>(13.-22頁)</sup>は、スポーツにおける技術は共通感覚性のものであるという技術の認識転換をもたらし、より現場との接点を求めたものとして高く評価されるべきである。

しかしこの場合、技術がなぜ共有しうるのか、技術はなぜ共通感覚性を帯びるのか、というその根拠は、そこでは明確にされていない。ここにおいて、技術はなぜ共通感覚として共有されるのか、すなわち、「MERLEAU-PONTYの“共通感官”(sensorium commune)の意味での共通感覚性の分母(Nenner)」<sup>(12.-s.112)</sup>に技術的性格が付与されることの証明をする必要がある。この論理的根拠を示すことによって、本論における技術に関する理論の正当性が証明されるからである。

以下の考察は、現象学における確信の成立構造の原理<sup>(27.-65頁以下)</sup>に基づくものである。ここでは、この原理をわれわれの問題との関係から次のように理解しておく。「われわれがものごとやできごとに対して確かにそうだと信じることができる根拠は、客観的な真理がそこにあるからではなく、意識内に不可疑性の側面が生じるからである」と。この原理は、現象学の命題として言われるように、ものごとの絶対的な“正しさ”ないし“正しい認識”を得るためのものではなく(現象学では客観的存在や正しい認識の存在から出発していない)、自分が知覚したり感じたりしたことを確信するようになる根拠を示すものである。したがって、現象学的態度では、“ある”とか“正しい”“そうだ!”という判断は、主観の外にある基準からではなく、主観内に“確信”ないし“妥当”(Geltung)が生じるか否かという基準から下されるという立場に立っている。このようなとらえ

方は、スポーツ技術の存在やその正しさを判断する上でも重要な契機となる。

いまここで、あるスポーツ運動ができるようになるためにその運動を練習している生徒がいるとしよう。またその際、そこに教師ないし指導者がいてその生徒の運動を観察し、助言を与えている場面を考えてみよう。こうした場面は、運動の実践現場ではごく普通の光景である。このような状況下において、ある生徒が練習対象となる運動がなかなかうまくできないような場合、その生徒はどうしてうまくできないのかを反省し、その都度その都度新しい運動遂行上のポイントを探しそれを頼りにして試行を重ねるだろう。また、指導者はその生徒の運動のどこが悪いのか、どこに欠点があるのかを探り、その運動に関する知識と観察の結果を総合して運動遂行上に有効と思われる助言を与えるだろう。このようなとき、両者の関心がその運動の達成を保証する“運動のし方”や“感覚”に向けられていることは明らかであろう。また、この共同作業において、その生徒がその運動に成功したり、うまくできるようになった場合、生徒自身のなかにその運動達成を引き起こした何らかの“投げ所”となる“運動のし方”や“感覚”があったことを漠然とでも感じそれを確信するであろうし、もし指導者が与えた助言に従ってその生徒が試行したのであれば、指導者は自分の与えた助言内容が正しかったと自信や確信をもつであろう。言うまでもなく、その際の助言は生徒の“運動のし方”や“感覚”にかかわっている。そして両者がとらえた“運動のし方”や“感覚”の間にずれがなければ、それはますます“正しい”ものとして両者の間で認識されていく。まさしく生徒と指導者を結びつけているのはこの“運動のし方”や“感覚”; すなわち、技術なのである。金子の理論によれば、まさにそこに“共通感覚的図式技術”を措定できる根拠があるのである。

このことから2つのことが導かれる。一つは、運動ができるようになった段階で、運動者は自分自身のなかから運動達成の契機をつかみ、それがその運動を実行する上で大切なポイント(技術)であると思うようになる(確信)ということ、もう一つは、その契機が観察者ないし他者と共有されるものであれば、それは運動達成にとって“正しい投げ所”として指定される、ということである。当然の如く、それは内的な感じにとどまる要

素であるが、外的で可視的な運動経過の上に見れる。しかし、そこでの内容はただ“そう思った”、“きっとそうすることがいいのだろう”という程度のきわめて信頼性ないし客観性に乏しいものとして理解されるのが一般である。しかしながら、確信の成立構造の原理によれば、運動者のとらえた運動達成の契機は単なる“感じ”や“思いこみ”といった側面をもつものの、“このようにしたらできた、あるいはうまくいった”という“直接判断”(unmittelbare Urteil)<sup>(10.-S.50;188頁)</sup>を通した“原始的に与える働きをする直観”(originär gegebende Erschauung)<sup>(9.-S.13;64頁)</sup>による不可疑的な動かし難い彼なりの“確信内容”であり、運動者はそこに一定の運動達成の秩序をとらえていることの重要性に目を向けなければならない。つまり、運動者にとってはその内容は運動達成を支える上での絶対的なものとなっているのである。運動者にはこの“確信内容”があるからこそ、それ以降の運動遂行を自信をもってできることになる。この意味で、運動者がとらえた“運動の仕方”や“感覚”は、その個人によって“確信”されたある面での運動達成の契機であり、そこに技術性が指定されることになる。技術とはこのような確信的性格のものであることをまず指摘おかなければならない。したがって、われわれが言う技術とは、客観的な自然法則の視点から見た動きのメカニズムとは基本的に異なることになる。

このような“確信(技術)”は言うまでもなく“個人の確信(技術)”であり、まだ客観性を帯びてはいない。しかし、他者に共有される素地をもっている。なぜなら、各個人がそれぞれの活動のなかで同一運動を練習している場合に、ほぼ同じ“仕方”や“感覚”を確信するということが大きな可能性をもって生じるからである。それは、われわれ人間の“身体の同一性”<sup>(27.-44頁以下)</sup>による。これはエクスキュル(UExKÜIL, J. v)の“環境世界”(Umwelt)<sup>(15.-197頁以下;31)</sup>の考え方からも受け入れられることであり、確信の共有の根拠でもある。こうしたことから、“個人の確信(技術)”のなかに“共通の確信(技術)”となる素地の存在が指摘され、運動達成の契機(技術)が共有されることがわかる。こうして、技術というものが共有されるものであること、また共通感覚の俎上に載るものであることが明らかになる。金子のいう“共通感覚的図式技術”は誰もが共有できる感

覚上の技術という観点から、バイオメカニックス的技術と対比されたのであるが、その主張の正当性はまさにこの“共通の確信”という視点から証明される。この場合、技術の客観性とは、各個人が他者の確信(運動の仕方や感覚内容)を相互に了解し合っているという構造としてとらえられる“間主観性”ないし“相互主観性”<sup>(26.-221頁)</sup>と解されなければならない。自然科学的な客観性ないし力学的法則上の“正しさ”を基準にしていないことに注意しなければならない。

以上の考察で、技術に共通感覚性が付与されることが証明されたことになる。

#### 4. 技術のノエシス-ノエマ構造

これまでの考察から、技術の共通感覚的性格が“確信”の視点から明らかにされたが、それでは、この“確信”はどのようにして生じるのか、またこの“確信”と技術はどのような関係構造をもつのか。これを究明するのが、ここでの課題である。

われわれは、運動遂行の際にこれから行おうとする運動の展開図式を想起する。それは「感覚運動システムのなかで生じる、実行のための内的指令」<sup>(1.-S.116;41頁)</sup>としての運動投企(Bewegungsentwurf)であるが、現象学的に見れば、一連の流れの全体ないし志向的統一と解されよう。つまり、“導入的契機”(leitendes Moment)<sup>(12.-S.108)</sup>としてのこの運動投企は、そこにこれから展開される目標像をとらえているからである。このような構造は、現象学ではなくノエシス-ノエマ構造と呼ばれ<sup>(9.-S.200ff.; II -103頁以下; 26.-104頁以下)</sup>、確信成立の本質的構造とされる。運動を行う際の“このようにすれば”というわれわれの意識(ノエシス)は、“～ができる”という運動の全体像(ノエマ)をすでに含み込まざるをえない。すなわち、“このようにすれば”という導入的契機(運動投企)で、“～ができる”あるいは“それでは～ができない”という“確信”が必然的に生じてくるのである。これは、われわれの意識活動の原理的構造なのである。この場合、ノエシス(的契機)とは意識の志向的契機であり、ノエマ(的相関者)とはそれによってもたらされる運動の全体像と理解される<sup>(27.-79頁)</sup>。この両者は統一的に理解されなければならない。フッサール(HUSSERL, E.)も言うように、「いかなるノエシス的契機も、それに特有に帰属するノエマ的契機なしには、ありえない」<sup>(9.-S.215; II -126頁)</sup>から

である。したがって、どんな“確信”もこのような〈ノエシス—ノエマ〉の構造から生じる。このように見てくれば、運動投企は〈ノエシス—ノエマ〉の構造のなかで、運動達成の契機として“確信”されている動かし難い“拠り所”であることになる。

しかし、運動投企のこの動かし難い“確信”には、現象学的に見れば、“可疑性”(Zweifelhaftigkeit)と“不可疑性”(Zweifellosigkeit)の側面があるといわれる<sup>(26.-90頁以下)</sup>。フッサールはそれを“超越”(Transzendenz)と“内在”(Immanenz)という言葉で表し、超越的知覚(transzendente Wahrnehmung)には疑わしさがあるが、内在的知覚(immanente Wahrnehmung)には疑わしさはないとした<sup>(9.-S.96ff.: I-196頁以下)</sup>。われわれの“確信”にはこの二面性があることをまず指摘しておかなければならない。スポーツの運動場面において、われわれが獲得する運動達成の契機は、結局は各個人がつかんでいるものである。それは、当事者の疑えない動かし難い“確信”によっていることはすでに述べた。しかしよく考えてみると、この“確信”は運動者のそう思う強い気持ちであって、実際のところ、その“運動のし方”ないし“感じ”がほんとうにその運動の達成を保証しているのかどうかについては、疑いの念を拭いきれない。“確信”とは常にそういうものであるが、この“確信”がなければ、われわれは運動遂行の際の拠点を失ってしまうし、ましてや他人を技術指導することなどできなくなってしまう。確信とは、この場合、運動遂行の“拠り所”なのである。このように考えてくると、この“確信”は一見信頼のおけないようなものでありながら、それがないと運動の遂行が成立しないものであることがわかる。したがって、“この運動のポイントはこうすることだ”と“確信”しているとしても、違うかもしれない、思い込みかもしれないのである(可疑性=信頼できない=超越)。この意味で、〈ノエシス—ノエマ〉の構造から生じた“確信”にはまだ信頼できない要素がつかまとう。しかし一方で、本人がそう思った、あるいはそう感じたこと自体は、そう思わなかったかもしれない、そう感じなかったかもしれないなどということはなく、それは疑いのような事実である(不可疑性=確かなこと=内在)<sup>(26.-93頁,27.-81頁)</sup>。これは自分の身体や感覚を信じざるをえないというところで、われわれが自分の行

動を信じる最後の基底として確信成立の根源といわれる<sup>(27.-80頁)</sup>。ここに、運動投企の“確信”が信頼のおけないものでありながら、運動遂行の“拠り所”となっている根拠がある。

しかし、この内的指令としての運動投企は、学習の初期や十分なメンタル・リハーサルなどが許される場合にのみ強く意識の前面に現れる。運動が習熟し、自動化(Automatisierung)<sup>(19.-S.382,413頁)</sup>され、また習慣(habit)<sup>(11.-pp.134;上-188頁以下)</sup>として行われるようになると、ジェームス(JAMES, W.)の言うように、意識的注意の減退が起こる。そして、「注意にのぼらない感じの過程」<sup>(11.-pp.142,199頁)</sup>が進行するようになる。バートン(BURTON, M.)によれば、それは記憶から固有受容性感覚への運動誘導の役割の引継ぎが行われたためである<sup>(2.-260頁以下)</sup>。いずれにせよ、細部の直接的な内的指令は間接的になり、目的や観念がそれにとって代わるようになる。つまり、漠然とでも目的を考えれば即座に運動は実行されるのであり、「この場合には観念と実行の間には何も意識するものはない」<sup>(10.-pp.423;下-269頁)</sup>。このように、運動のことだけを考えれば、あるいは目的の観念だけで一連の運動は正確に経過するのである。このような現象に対して、すでに100年以上も前にイギリスのカーペンター(CARPENTER, W. B.)は、「Mental Physiology」(1888)のなかで、はじめて観念運動(ideo-motor-action)なる名称を用い詳細に論じている<sup>(4.-pp.279-315)</sup>。このことは、すでに指摘した運動ゲシュタルトの法則(目標設定によって運動形態が決定される)と同じ現象を問題にしていると言える。したがって、運動が自動化され習慣化されるころでは、ノエシスの契機としての運動投企には、ほとんど運動成立のための具体的な指令は現れなくなる。しかし、これが運動学習のプロセスのなかでの変化であることを考えれば<sup>(19.-S.382,413頁)</sup>、この観念ないし目的としての運動の契機には、内的指令としての“内在”の性格が依然として内包されており、それが変化したものとして考えることができよう。

ここで重要になってくるのが、この内在(知覚)が何をとらえているのかということである。運動遂行に際しては、練習を通じて身体四肢をどう操作したらよいかという具体的なことが学習される。この場合、固有受容性感覚<sup>(2.-259頁)</sup>の働きが重要な役目を果たしている。そこでは、手足をどう操作するのか、腰の回転をおさえるのか、頭の



位置に気をつけるべきなのか、脱力するのか、また、より速くあるいはより遅く動かさなければならないのか、より強くあるいはより弱く、またより大きくあるいはより小さく行うべきなのか、さらにはもっとリズムカルになめらかに行わなければならないのかなどの感覚内容がとらえられている（ここで注意すべきことは、われわれがの場合にとらえている速さ、遅さ、大きさ、小ささ、強さ、弱さ、などの時間関係、空間関係、力関係は、内在的な感覚体験によるものであり、そこでは精密な力学的な概念を必要としていないということである。つまり、われわれの運動遂行の構図は“内在”（知覚）の諸関係から構築されているのである。このことから、それは自然法則の諸概念の反映でないことがわかる）。これらの要因によって運動の合理性がめざされ運動成立がもたらされる。このように、内在（知覚）では運動達成にかかわる具体的な身体四肢の操作のし方をとらえており、その内容にはもはや疑えない技術性が付与され、われわれはそれを“確信”するようになる。

このように、技術は〈ノエシス—ノエマ〉の構造による“確信”からわれわれの意識の俎上へのぼってくる。言うまでもなく、こうして生じた“確信（技術）”は、まだ“合理的”だとか“正しい”ものとして位置づけられない。それらは“共通の確信”によって確かめられることを通して前面に押し出され、そのときはじめてわれわれはその“正しさ”を問うことになる。

### 5. 技術のモルフェー的性格

これまでの考察から、スポーツ技術は運動の細部にまで関与するものであること、目的論的であること、主観的な運動形成から発生すること、そして確信的な性格であることが明らかにされた。われわれはこのように技術がより主観的領域に近づけられることの証明を通して、技術が運動者自身にとっての問題であることを強調してきた。この場合、技術は主観のなかでは、単なる漠然とした無定型な感覚にとどまらず、“運動のし方”として具体的な“像”となっている。われわれはスポーツ運動を遂行する場合、このように“イメージ”なり“運動表象”を思い浮かべ、それが運動投企となって現実性を帯びることを通して遂行感覚を得るようになる。このとき、主観内において形成

されるのは、“運動のし方”としての“全体像”ないし“感覚的像”，すなわち運動の“かたち”である。ここに、技術と“かたち”に関する問題が浮き彫りにされてくる。

この運動の“かたち”は主観内の運動“像”であり、その実行とともに当然のごとくそれは外的な可視的運動経過を示し、われわれはそこにまとまりとしての“運動形態”を問題にするようになる。もちろん、この場合の“運動形態”も“かたち”であり、それは言うまでもなく他者が目でとらえる対象で、通常われわれが関心を向け、指導・研究の対象とするものである。それらは、それぞれ“内的かたち”、“外的かたち”と呼ぶことができる。つまり、“内的かたち”はわれわれの主観内の心的な領域での“像”であり、“外的かたち”は他者が目でとらえることのできる運動経過のまとまりとしての“像”（運動形態）である。このように、運動にあって、“かたち”は二側面をもつ。しかし、この両者の性質とその関係は慎重に理解されなければならない。

言うまでもなく、“外的かたち”は“内的かたち”の結果的側面である。この場合、“内的かたち”は“そうしよう！”という意図性の像であるのに対し、“外的かたち”は“そうなった”という客観的事実である。ここで重要なことは、“内的かたち”は“外的かたち”にすべて反映されないということである。“内的かたち”は立体的—重層的に構成され、“外的かたち”はその表層部分であるといえる。この場合、“内的かたち”は、確信や自信、不安や恐れ、運動感覚、力動感、印象などを基底として運動表象、視覚的イメージ、感覚的像、具体的な身体四肢の位置関係とその変化といった要素が輻輳して構造化され、一つの“かたち”を形作っている。“外的かたち”は、そのうちの他者の視覚に呈示可能となる客観的要素、すなわち表層部分の具体的な身体四肢の動きだけである。もちろん、この客観的要素は過去形のものとしての性質であり、主観内部でとらえられた意図性の動きの要素とは性質を異にするものである。すでにこれまで見てきたように、われわれが“確信”している技術は、この意味で、“内的かたち”である。

このことから、外的に現れた客観的な運動経過だけをとらえ、それを計測・比較したり、また、筋電図や力量計を用いてその力の発揮状況などを

調べても、それは“内的かたち”とは性質を異にした結果としての表層部分という理由から、基本的に技術の把握になっていないということがわかる。技術の把握や解明は、“内的かたち”の立体的・重層的構造に目を向けてとらえてこそはじめて可能になる。しかし、それには分析的な自然科学的方法ではなく、その構造を全体として把握しようとする方法が必要である。現象学や運動モルフォロジーの方法がここにその存在意義をもつことになる。専門家が一目で技術ないしその運動の正しさや欠点を見抜き、またそれが妥当であるのは、まさに技術を立体的に、全体の視点からとらえているからであり、それが、精密な自然科学的諸概念からの判断とは異なっていることに注意しなければならない。そこには、“かたち”を“静”ではなく、“動”として、“発生”“生成”“変化”，そして“リズム”<sup>(21.-65頁)</sup>としてダイナミックにとらえる視点がある。それはまさにゲーテ(GOETHE, W. V.)の“形態学(モルフォロジー)”(Morphologie)提唱の意図とみごとに重なり合う<sup>(6)</sup>。

ゲーテが彼の“形態学”を、かたちないし形態を意味するドイツ語の“Gestalt”(この場合、後のゲシュタルト心理学や全体性心理学の中心概念である“Gestalt”と理解されてはならない)ではなく、ギリシャ語の姿かたちを顕す“morphe”をもとにして、“Gestaltlehre”ではなく“Morphologie”としたのには、それなりの理由があった<sup>(24.-168頁)</sup>。ゲーテによれば、このドイツ語の“Gestalt”は変化が捨象・抽象化され、他とのつながりを持たない固定された内容を示すという<sup>(6.-43頁)</sup>。ゲーテが構想した学説は、対象を現実的な視点から見つめ、全体を部分部分に分解せず全体を不可分のまとまりとして受けとめようとするものであった。したがって、“Gestalt”という言葉をもちいると、その“かたち”は抽象化されたものとなり、彼の構想に反したものになってしまうのである。「形態学というものを紹介しようとするならば、形態について語ることは許されない」<sup>(6.-44頁)</sup>ということの意味は、まさに、ゲーテの構想した形態学が、“Gestalt”(形態)を対象としたものではなかったことの表明なのである<sup>(20.-66頁以下)</sup>。

この関連で、中村は、“かたち”を表すギリシャ語にはエイドス(英語のformの語源で、われわれの眼に見える、もののかたちを指す)、アイコン(イ

メージにつながる)、それにモルフェー(morphe)があることに注目した<sup>(20.-65頁)</sup>。そのなかで、モルフェーは「表層的ではなく、深層的な、静的ではなく動的な姿・形」<sup>(20.-65頁)</sup>を表すダイナミックな意味をもつことから、リズムとの関係も浮き彫りにされるという<sup>(21.-65頁)</sup>。こうしたことから、中村はゲーテが彼の“形態学”をこのギリシャ語の“morphe”にもとづいて、“Morphologie”としたことの意味の大きさを指摘している<sup>(20.-66頁)</sup>。

われわれがこれまで指摘してきた技術の“かたち”が単なる静的なものの“かたち”でなかったことを考えれば、ここにおいて、ゲーテの意図していた動的でダイナミックな“かたち”と重なり合うことが理解される。こうして、われわれが問題にしてきた技術の“かたち”の学問的根拠も示されたことになる。つまり、われわれの問題圏では、“かたち”は“モルフェー的な形態”<sup>(21.-65頁)</sup>として認識されることで、われわれの主張する技術が“モルフェー的性格”をもつことが指摘される。以上の考察から、スポーツ技術は、いわば、“モルフェー的技術”と措定されることになる。これによって、技術の本質的性格が明らかにされたと言えよう。この技術の本質的性格を認識することによって、これまで展開してきた論拠から、現場に携わる者がとらえる技術の実践的な諸問題の解決が図られることになろう。

#### おわりに

これまで展開してきた技術のとらえ方は、スポーツ技術に関する問題に、現場に目を向けた一貫した立場から答えることができる技術理論の構築のための基礎を提供している。スポーツ運動の達成に大きく寄与する妥当な“技術”の理論は、現場で何が起きているのかをしっかりと見据えておくことが起点となっていることを、最後に指摘しておきたい。

#### 引用・参考文献

- 1) Beyer, E. (Red.) (1987) : Wörterbuch der Sportwissenschaft, Verlag Karl Hofmann ; スポーツ科学辞典(朝岡監訳), 大修館書店, 1993
- 2) パートン, M. (1990) : 動物の第六感(高橋訳), 法政大学出版局
- 3) Buytendijk, F. J. J. (1956) : Allgemeine

- Theorie der menschlichen Haltung und Bewegung, Springer Verlag
- 4) Carpenter, W. B. (1888) : Mental Physiology, New York : D. Appleton and company, 1, 3, and 5 bond street
  - 5) Czabanski, B. (1984) : Zur Korrektur sporttechnischen Fehler, In : Fehler Mängel Abweichungen im Sport, (Hrsg. : Dieter Bremer/Nico Sperle), Hans Putty Verlag, S. 39-62
  - 6) ゲーテ (1980) : 形態学序説, 「ゲーテ全集14」, 潮出版社, pp. 39-49
  - 7) Grosser, M./Neumaier, A. (1984) : technick-training, BLV Verlagsgesellschaft
  - 8) Hochmuth, G. (1974) : Biomechanik sportlicher Bewegung ; スポーツ運動のバイオメカニクス (遠藤訳), 新体育社, 1981
  - 9) Husserl, E. (1976) : Ideen zu einer Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie, I. Halbband, Martinus Nijhoff ; イデーン, I -1, 2 (渡辺訳), みすず書房, 1979, 1984
  - 10) Husserl, E. (1963) : Cartesianische Meditationen und Pariser Vorträge, Martinus Nijhoff ; デカルト的省察 (船橋訳), 「世界の名著51 プレンターノ・フッサール」, 中央公論社, 1970, pp. 173-353
  - 11) James, W. (1892) : Psychology-briefer course, New York : Henry Holt and company ; 心理学上・下 (今田訳), 岩波文庫, 1992, 1993
  - 12) Kaneko, A. (1985) : Prolegomena zur Methodik der sporttechnischen Neugestaltung, 筑波大学体育科学系紀要, 第8巻, pp. 101-113
  - 13) 金子明友 (1985) : 運動技術の今日の問題性, 「体育科教育10月増刊号」, pp. 20-22
  - 14) 金子明友 (1988) : 体育学習のスポーツ運動学的視座, 「体育・保健科教育論」, 東信堂, pp. 55-67
  - 15) 木村真知子 (1989) : 自然体育の成立と展開, 不昧堂出版
  - 16) Klemm, O. (1936) : Die Entdeckung der Bewegungsgestalt, In : Arbeitsschule, Heft 1, S. 8-16
  - 17) Klemm, O. (1938) : Zwölf Leitsätze zu einer Psychologie der Leibesübungen, In : Neue Psychologische Studien, Heft 9 ; S. 385-398
  - 18) Klemm, O. (1954) : Leistung, In : Neue Psychologische Studien, Band 12, Heft 1, C. H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung, S. 65-81
  - 19) Meinel, K. (1960) : Bewegungslehre, I. Auflage, Volk und Wissen Volkseigener Verlag, : スポーツ運動学 (金子訳), 大修館書店, 1980
  - 20) 中村雄二郎 (1991) : かたちのオディッセイ, 岩波書店
  - 21) 中村雄二郎 (1992) : かたちの再考, 「現代思想」, 11月号, pp. 63-69
  - 22) Schöpe, H. G. (1991) : Sportmotorische Koordination und Sportmotorische Technik, In : Beiträge zur Sportwissenschaft, (Red. : Letzelter, H./Schope, H. G.), Verlag Ingrid Czwalina, S. 141-169
  - 23) Stimpfel, E. (1933) : Der Wurf, In : Neue Psychologische Studien, Band 9, Heft 2, S. 105-138
  - 24) 高橋義人 (1988) : 形態と象徴, 岩波書店
  - 25) 高橋義人 (1992) : 形態学的思考から新しき知へ, 「現代思想」, 11月号, pp. 80-93
  - 26) 竹田青嗣 (1989) : 現象学入門, NHK ブックス
  - 27) 竹田青嗣 (1993) : はじめての現象学, 海鳥社
  - 28) Thomas, A. (1974) : Die Entwicklung handlungspsychologisch-psychomotorischer Verhaltensanalysen in ihrer Bedeutung für Sport und Leibeserziehung, In : Sportwissenschaft, Heft 3, S. 258-275
  - 29) Voigt, E. (1933) : Über den Aufbau von Bewegungsgestalten, In : Neue Psychologische Studien, Band 9, Heft 1, S. -32
  - 30) ユクスキュル (1973) : 生物から見た世界, 思索社
  - 31) 養老猛司 (1991) : 唯脳論, 青土社